

CAL
EA947
B71
#30 May 1980
DOCS



カナダ文化特集

1980年5月
No.30

DEPT. OF EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
OTTAWA
JUL 11 1980
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01030012 0

60984 81800

トピックス——2

トルドー・大平両首相が会談——4

カナダ文化の現況 ノースロップ・フライ——5

カナダの芸術とナショナリズム
ジョージ・ウッドコック——7

11人の官能的抽象画家たち——8

外国生活と「根」の問題 平野敬一——10

カナダ——文学と風土

対談●ジャック・ホッジズ／西本晃二——11


エドモントン便り 藤永 茂——14

エミリー・カーの芸術(書評)…… 浅井 晃——15

編集後記——15

カナダ

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

トルドー政権の所信表明 石油資源のカナダ化など推進

今年の二月に選出されたトルドー政権は、四月十四日、第三十二議会の開会に当たり、インフレ対策、エネルギーの国内価格、代替エネルギーの開発、憲法改正などを中心とした所信表明を行なった。エドワード・シユライヤー総督が読み上げた所信表明の内容は要旨次の通り。

一、政府は現在の経済状況の下で最も困っている人々を優先的に救済する措置を講ずる。

一、カナダの国内状況に合った国内石油価格を設定する。この価格は、石油の生産州および生産会社とその資源と投下資本に見合う利益を得る権利を反映するものとする。石油会社のコスト、利潤、投資額、カナダ資本の比率などを調査する石油価格監査庁を設ける。輸送機関の石油・ガソリン消費を節約するため、自動車に対する強制燃料効率基準を設定する。

一、州政府と協力して、石油から他のエネルギー源へのできるだけ速やかな移行を奨励する措置をとる。またケベック州および大西洋諸州への天然ガス・ハイフラインの早期実現を期待する。石油公

社ベトロ・カナダを維持し、同公社が外国供給者と石油購入の交渉および契約に積極的に取り組めるべく、その権限を拡大する。新石油・天然ガス法を制定し、(石油・天然ガス開発に関して)ベトロ・カナダおよび国有地で営業する他のカナダ系会社に優先権を与える。新しい、しかも再生可能な石油代替エネルギー源の開発を促進するため、代替エネルギー開発公社を設立する。一九九〇年までに石油産業におけるカナダ資本の比率を五〇パーセントまで引き上げる措置をとる。

一、天然資源を基礎に、活発な産業振興策をとり、雇用の増進、経済成長の向上、地域間バランスの改善、経済のカナダ化の推進を図る。その一環として、農産物輸出公社を設立する。

一、科学技術の発展に力を入れる。またカナダ産業の競争力を高めるため、国営商社を設立する。団体交渉制度を改善するため、労働情報局を設ける。外国投資審査法を改め、大手外国企業がカナダに相当の利益をもたらしているかどうかを再審査できるようにする。

一、議会における代表制および責任制が最高度に機能するように、選挙制度を調査する委員会を議会

に設置する。連邦制度再生のため、憲法改定への作業を再開する。二つの主要言語グループの最大限の発展と文化的モザイクの振興に力を入れる。

一、情報公開法を制定して、国民が政府の資料に接し、また政府が個人についても持っている情報に接することを可能にする。

一、積極的な外交政策を展開する。北大西洋条約機構(NATO)の強化を図るとともに、核の脅威を排除するため、外務省内に軍縮担当大使を創設し、軍備制限および縮小に関する国際交渉を積極的に支援する。

自由党、一議席を追加

トルドー首相の率いる自由党は、三月二十四日、ケベック州で行なわれた臨時選挙で一議席を追加、下院の同党勢力を一四七に伸ばした。ケベック州のフロンテナク選挙区では、先の総選挙の最中に候補者が死亡したため、改めて選挙を実施したもの。これで自由党はケベック州七五議席のうち、七四議席を制したことになる。

ニューファンドランド沖に油田

二億バレル以上が採掘可能?

長い間経済的に恵まれなかったカナダ最東のニューファンドランド。その州都セント・ジョンズの南西三二〇キロにあるヒバーニア0-15鉱区で、昨夏、シエプロ

ン・スタンダード社(本社カルガリー)が石油を掘り当てたことから、同州の将来はにわかにも明るくなった。

昨年十二月のテストで、主要な油層が日産二六〇〇バレル以上の流出量を記録し、シエプロ社は商業的に採算がとれると発表した。ニューファンドランド州政府の試算によると、同地区で二億五千万バレルから一五億バレルの石油が回収できるという。

大阪でカナダ学会の年次大会

日本カナダ学会第四回年次大会が三月末、大阪で開かれ、カナダ文学、労働災害対策、宗教とカナダ社会、カナダ史などについて講演と研究発表がなされた。

また同時に開かれた総会で、新会長に平野敬一(東大)、新副会長に小浪充(東外大)と伊藤勝美(近畿大)の各氏が選任された。これに伴い、事務局も津田塾大学から東京外国語大学の小浪研究室に移された。

下院議長にソーヘ女史

カナダ連邦議会の下院議長に、初めて女性が就任した。下院は日本の衆議院に相当する。

新議長になつたのは、前トルドー内閣で科学技術大臣、環境大臣、通信大臣を歴任したジャンヌ・ソーヘ女史。一九七二年に政界入りをするまで、公営放送CBCでジ



ャーナリストとして活躍していた。弁護士以外の方が下院議長に就任するのも初めてのことである。

なお、第四期トルドー内閣には、女性が二人——モニク・ペガン厚生大臣とジュディ・エロラ鉱山担当国務大臣——が入閣している。

「赤毛のアン」のそっくりさん プリンス・エドワード島から来日

前号でお知らせした劇団「四季」のミュージカル「赤毛のアン」全国公演のPRのため、「アン」の故郷「プリンス・エドワード島から「アン」のそっくりさんが来日した。四年前、プリンス・エドワード島のケイブンディシユで五年ごとに行なわれる「アンそっくりさんコンテスト」で優勝しただけあって、彼女ヘザー・マクニールさん(写真)は、ルーシー・モンゴメリーの描く「赤毛のアン」のイメージにぴったり。小柄で顔にはソバカス、つんとそつた鼻、髪はもちろん(金)色(本当はかつら)。プリンス・エドワード大学の三年生で、ルーシー・モンゴメリーの遠縁にあたるという。マクニール

ルさんは、一週間の滞在中、「四季」公演ミュージカルの「アン」役、久野綾希子さんと会って、大喜びだった。



公演初日には、マクニールさんのほか、「赤毛のアン」ミュージカルの音楽を作曲したノーマン・キャンベルさん、共同で歌詞を担当した夫人のエレーヌさんも出席した。

京都で日加経済人会議

日本とカナダの経済界代表が民間レベルで意見を交換する日加経済人会議（第三回）が、五月十二日から十四日まで、京都国際会館で開かれた。

会議には、日本側から横田・日加経済人会議日本委員会会長（日本鋼管社長）、田島敏弘・日本興業銀行常務取締役、両角良彦・電源開発総裁、高島節男・三井金属鉱業社長、辻良雄・日商岩井相談役、松尾昂一・トヨタ自動車工業常任監査役、カナダ側からはカルバー・日加経済人会議カナダ委員会会長（アルキャン・アルミニウム社長）、ガーディナー・ロイヤル・バンク

・オブ・カナダ副会長、ハート・カナダ国有鉄道副社長、ボビー・ノーセン・エナジー・リソーシズ会長、ブラック・サイブラス・アンビル鉱山社長、ハリソン・プリティッシュ・コロンビア・パッカーズ副会長、ニウオール・ドウボン・カナダ社長らが出席した。また、来賓として、河本敏夫・日加議員連盟会長とランキン駐日大使が挨拶した。

サスカチュワン州に世界最長の光ファイバー網

サスカチュワン州の州営電話公社サスカチュワン・テレコムユニケーションズは、今秋、世界最長の光ファイバー網を敷設するプロジェクト（総経費五千六百万ドル）に着手することになった。これは、音声、データ、ビデオのシグナルを伝達する多目的広周波網で、三千二百キロメートルにわたって州内五十以上の都市を結ぶことになっている。完成予定は四年後。サスカチュワン・テレコムユニケーションズでは、プロジェクトの第一歩として、このほどノーザン・テレコム社（本社モントリオール）に光ファイバーおよび関連機材を発注した。

光ファイバー（ファイバー・オプティックス）は、直径〇・一ミリ程度のガラス繊維の中を通るレーザー光線で、テレビ、電話、データなどの伝達に使われる。通常の電線やケーブル・システムと比

べ、何倍もの情報を送ることがきる。

日清製油の坂口会長 カナダ菜種協会の名譽会員に

カナダ菜種協会は、三月にトロントで開かれた年次総会で日清製油の坂口幸雄会長を終身名譽会員に選んだ。名譽会員としては五人目、外国人としては初めてである。またカナダ政府を代表して、ヘッバー運輸大臣からトルドー首相署名入りの表彰状が授与された。

カナダから日本への菜種輸出は現在、年間およそ百万トン、金額にして約一億カナダドルに上るが、坂口氏はカナダの菜種産業の育成発展に大きく貢献したとして、菜種協会およびカナダ政府が功績を讃えたもの。

次期戦闘機にCF-18A カナダ政府が決定

カナダ政府は、次期戦闘機に米国防タネル・ダグラス社のCF-18A型戦闘機を採用することを決定した。新戦闘機は、北米大陸防空軍司令部（NORAD）で使用されているCF-101ブードウ迎撃機、北大西洋条約機構（NATO）で就役しているCF-104スター・ファイター、NATOで就役することになってきたCF-5戦闘機に代わるもので、一九八二年から八九年までに一三七機を購入することになっている。契約価格は二

三億七千万ドル。

次期戦闘機にCF-18A型機を選んだことについて、カナダ政府当局は、「北米、NATO北部、および中央ヨーロッパという地理的、戦略的にも多様な地域および状況下で現在三種の飛行機が行なっているさまざまな役割を担う多目的戦闘機」という選択条件に合致している、と説明している。

またグレイ通産大臣によると、CF-18A型機の購入によって、航空宇宙産業、電子機器産業を中心にカナダで二九億ドル余の経済活動が生じることになるとい

日加議員連盟 新会長に河本氏

衆参両院の有志の議員で作っている日加議員連盟では、四月、前尾繁三郎会長の任期切れにもと



ランキン大使と談笑する河本氏。

ない、河本敏夫氏を新会長に選出した。会長に就任した河本氏は、「日本とカナダは、太平洋を隔てた隣国の関係にあるという地理的条件のみならず、政治経済ならびに文

化等の分野においても非常に大切な関係にある。今後は、政治経済の面のみならず、いろいろな面で両国の関係を深めていかねばならないという大きな課題があるものと思う。日加議員連盟としても、これらの問題に積極的に取り組み、両国間の友好と理解を深めていきたい」と、その抱負を語っている。日加議員連盟は一九七六年三月、カナダから上下両院議長を団長とする議員団の来日に先立って結成された。会員は四月現在、一九三人。

訂正

●過日発行された「日加修交五〇周年記念論文集」に次のような間違いがありました。お詫びして訂正します。

一五ページ 「84 東洋英和女学院……云々」を「英洋英和女学院がカナダ・メソジスト教会（現在のカナダ合同教会）のカートメル女史によって創設」に（広報紙「カナダ」第23号にも同じ間違いあり）

一八ページ 「村田花子」を村岡花子」に。
四七ページ 「ごく小さなカナダなのかも……」の脱字は「知らない」。

●また「背景説明レポートNo.14 アルバタ州」の中で、州都がカルガリーとなっているのは、もちろんエドモントンの間違いです。人口は五七三、七〇〇人（一九七七年）。

カナダ文化の現況



ノースロップ・フライ

(文芸評論家)

絵画や映画、さらには文学にまで強く見られるドキュメンタリー的な関心は、カナダ文化の際立った特徴である。それは遠く初期の探検家や宣教師の伝統、イエズス会の報告書 (Jesuit Relations) やハドソン湾会社の報告書の伝統を継いだものである。特に絵画においてこのような関心が強い。絵画はもともと旧石器時代に洞窟の奥深く始まった芸術であり、それ以来常に、まだ生まれぬ世界に通ずるものを画面上に表わし、闇の中で自然を彩色してきた。絵画は、非人間的世界の人間化を拒む、あるいは人間的なもの一切に同化するのを拒む沈黙の他者に対して、住む人もまばらな土地で、必死にこらえ抗う想像的努力の最前線に位置するといつてよい。

自然に対する魅了感は、一九三〇年頃まで、カナダ絵画の支配的特徴だった。もっと後の時代の、抽象的傾向の強い画家たち、たとえばリオペル (Riopelle) などにあっても、潜在意識においては風景という強固な基盤をもっている。中でもその探検的な側面、開拓者の側面はトム・トンブソン、エミリー・カー、七人グループに明らかであり、今でも目印のつけられた道跡やカヌーのカナダとして広く表現されている。画家はわれわれの目に単に眼前の風景から、遠く森の中の空地へと、あるいは川の曲がりくねりや彼方の丘陵の切れ目へといざなう。強烈な色彩コントラストをもつ表現主義やフォービズムの技法は、人間を意識せず、巨人タイタン達の無慈悲な闘いに没頭する自然界を暗示する。

この時期の文学は、絵画ほど隆盛を見なかった。このような遠視的な視野は、文学においてはレトリックな方向に向かいやすいからである。一世紀前に書かれたカナダの詩は、大半がまだ未熟で植民地風である。この時期の詩人で、後のトンプソンやエミリー・カーのように、内

部に激しい闘いを秘める自然を感じさせてくれる詩人はいない。ただ一人、無名のまま死んだイサベラ・クロフォードという作家には、ある種のきらめきを感じる。これは例外といつてよい。イギリス系カナダの詩は、E. J. ブラットの出現を待たねばならない。ブラットは、カナダの生活におけるこの遠心的、直線的なリズムの真実の意味を伝えた。彼の詩は、このリズムと深く関わったもの、たとえばイエズス会宣教師の苦難、カナダ太平洋鉄道の建設、攻囲された砦のイメージにも通ずる捕鯨や難破船の物語などをテーマにしている。

文化の動きは、政治や経済の動きと、方向においてもリズムにおいても異なっている。政治的、経済的にいえば、歴史の潮流がより大きな統一へと向かっていることは異論がなからう。ここで言われる統一 (unity) とは、均一性 (uniformity) を含んだ意味である。文化はそれ自体、植物に似た所があつて、成長するには根 (ルーツ) を必要とし、小さな地域、限られた場所を必要とする。アメリカを例にとると、五十州の連合体は文化的一体でなく多様な文化的発展の社会的背景となる政治的、経済的な一体性である。われわれは便宜上、アメリカ文学と言うが、現実の文化状況を語るときは、ミシシッピ派、ニュー・イングランド派、シカゴ派、あるいはパリ在住の国外グループなどについて語るのが普通だ。カナダの場合も同じである。この国が成熟してくるにつれ、ますます多くの地方が想像力の面

の面で活気づき、独自の文化的性格を築いてきた。

この事實は、とりわけフランス系カナダの作家に大きな利点を与えた。フランス系カナダの詩人や小説家は、自分が、いわば包囲された言語を鮮明化する作業に貢献していることをよく知っている。

このような状況における自分の社会的機能、作家であることの重要性について、彼らは何ら疑問を抱く必要がない。彼らの競争者といえ、遠くフランスに在るだけであるし、しかも彼らが生きてい

る社会的背景はフランスとは全く違う。イギリス系カナダの作家は、このような利点を持たなかった。反対に一世紀の間、相も変わらぬアイデンティティの危機に悩まされ続けてきた。第二次世界大戦後まもなく、フランス系カナダはいわゆる

「静かな革命」に入り、自分達が自己自身に属すると同時に、現代世界にも属するのだという自覚に到達した。これによって、それまでフランス系カナダの文化生活を狭く限定していた孤立的な特徴を大かた払拭したのである。一九六〇年以後、イギリス系カナダの文化が突然ドラマチックに沸き立ったが、これは一つにはフランス系の自己規定の動きに刺激されたためである。その時から、とてつもない文化的爆発が始まった。それは文学

と絵画の分野に、とりわけ激しかった。そして、しばしば文化ナショナリズムと呼ばれる全般的ムーブが作り出されたのである。

だが文化ナショナリズムという言い方

は、誤解を招きやすい。その理由は二つある。第一に、ナショナルリズムというのは、攻撃的な内容をもっている。しかるに文化自体はそれ自身のアイデンティティを求めただけであって、敵を求めたものではない。第二に、今日のカナダ文化はナショナルな次元での発展ではなく、各地域それぞれの発展の総和である。プリティッシュ・コロンビア州で起こっていることは、ニュー・ブランズウィック州やオンタリオ州で起こっていることと同じではない。モントリオールがなぜあれほど活気のある文化的中心地なのかという理由の一つは、そこにはたぐさんのモンオリオールがあり、それぞれが各自の複雑さと内的葛藤をもって存在しているからだといえる。

カナダには独自の教会は成立しなかったが、教会と国家との間には非常に密接な結びつきがあった。この傾向はとくに教育において著しく、これがカナダ文化に独特の色調を落としている。人種の努力が全く見られないカナダで、マイノリティ（少数者）はごく自然に吸収されているが、私にはこの理由が、英国女王が象徴するもの、つまり国家の首長と政府の首長との分離に関係あるように思われる。カナダは二つの民族によって建国されたために、百パーセント純粹のカナダ人がどんなものであるか誰にもわからない。ここに、文化にとって必要な遠心性のリズムが広がる余地が生まれたといえよう。

だがそれ以上に重要なのは、人と土地とはきわめて深い関係にあるというカナダ人の感覚であろう。

カナダ文学あるいはカナダの絵画には、どこを向いても自然の世界が出てくる。最も技巧的なアーティストでさえ、その想像力をこえたどこかに、非常に原始的なものを持たずにはいられない所がある。

土地に対するこの感覚は、土地を所有しているという感覚ではない。逆に所有してこなかったという感覚といつてよい。人間が汚し、閉じ込め、犯しはしたが、決して共に生きようとはしなかった自然がここにあるのだという感情だ。カナダの犯した罪の一大震源地を言えば、自然に対する暴力という点になるのではあるまいか。カナダ文学には、動物の死が頻出し、共鳴しあっているように思われる。まるで、カナダの毛皮貿易確立の犠牲となつて捕えられ、責めさいなまれた生き物たち全員の叫びが、今でもわれわれの心にこだましているかのようである。

十九世紀の修辭詩人たちは、死の感覚にも似た、哀愁を帯びあるいはノスタルジックな気分で、彼らの傑作を書いた。



トム・トンプソン作「十月の雪」(1944年、トロント市のDr. J.M. MacCallumより遺贈)。
The National Gallery of Canada, Ottawa

また物語詩人は、丸太が密集した川や氷河上での死の物語、ハンターが獲物との一体感を次第に築いていくような狩猟の旅とそこにおける死の物語を語っている。このようなことはもちろんカナダに限ったことではないかもしれない。しかしとりわけカナダでは強烈に表われ、その重々しい文学、とくに詩の多くに、非常に暗い外観を与えている。

最近の絵画、アレック・コルビルやクリストファー・ブラットの擬似リアリズム、あるいはジャン・ポール・レミューム、あるいはジャック・ボールド・レミューム、あるいは幽霊のような人物像には、一種の孤独感、虚無感が漂っていることが多い。自然の精霊を描くインディアンとエスキモーの芸術に対する関心は、一

種の陶醉にまで高まっているし、若い詩人の多く（スーザン・マスケレップ、ジョン・ニューラフ、グウェンドリン・マキューエンなど）は、あたかもインディアンやエスキモーがわれわれの文化上の直系先祖であつて、その伝統が彼らのみならずわれわれの間にも継承されているかのように、詩をよんでいる。小説の分野では、たとえばマーガレット・アトウッドの“Surfacing”やリアン・エンゲルの“Bear”といった、文明に背を向け、自然との一体化を志向する主人公を描いた一風変わった小説が書かれている。われわれはもはや、他所からやってきた占領軍ではなく、原住民はわれわれ自身なのである。

このアメリカ大陸を大勢の人間が占拠している。その占拠について、異なったイデオロギーにもとづき、異なった歴史の伝統を背負った、(アメリカとは)別の見解があるのだということ、アメリカ合衆国自身にとつてもきわめて重要なことであろう。そして、かつては地球の端にあり、今日では世界の列強に囲まれた一種のスイスのような国が、自国文化の「本国帰還」(Repatriation)を成し遂げたということも、世界全体にとって大きな意味をもつことに違いない。これが過去二十年の間に、カナダ各地で起こったことである。かつて地図上で境界も定かならなかつた地域が、成熟し陶冶されたイマジネーションの目と口をもって、世界に反応しつづつあるのがカナダ文化の現状である。

カナダの芸術とナショナルリズム

ジョージ・ウズドコツク
(文芸評論家)

カナダ芸術をナショナルステイックな観点から評価する批評家は、われわれがわが国の作家や画家、演奏家あるいは指揮者の中のナショナルな自覚の進展を考へる時に感じる現実とは、全くかけ離れた幻想を論じているにすぎない。自己認識は個人意識から出発して、個の連続体すなわち国(ネーション)を包含するに至る。国とは、国土と国民を含み、過去と現在、現実と理想を含んでいるが、しかしそれらはナショナリストが政治的という抽象的なものではなくて、人々が感情をこめて感じている実在要素なのだ。

だからカナダの芸術家たちが、ナショナル・アイデンティティ(国民的自覚)に強くこだわらざるを得なかったといつても、それは彼らがカナダ文化史の重要時期に外の世界に対して背を向けたということでは決してない。全く反対に、カナダ芸術に国民的自覚が沸き起こるとき、それはその時点で世界的に重要な運動を自己の体内に吸収し、それらの運動のもたらした洞察と方法(もつと狭義に限定したければコスモポリタンな洞察と方法と言つてもよい)をカナダに応用することによつて、常に自らの原動力を培ってきたのである。

このように外国からの借用物が、それまでのわれわれには気づかなかつたカナダの姿を、われわれの眼前に示してくれることがしばしばあつた。われわれは、いわば輸入めがねによつて、周囲の物がよく見えるようになったともいえる。カナダの国民的自覚の高揚は、外からの光に負うところが多いのである。

比較的最近では、「七人グループ」がわれわれの心にしっかりとカナダのイメージを植えつけた。その印象があまりに強烈だったので、たとえばわれわれがオンタリオ州北部を訪れると、そこにワイルドのあの自然模写の作品を見つけたりするほどだ。その七人グループに代表される現代の画家達でさえも、カナダの風景を描くのに、モリスやギヤニオン、スゾルコテが後期印象派(とくにピサロ)から学んだものを応用すると同時に、アール・ヌーボのくねくねした曲線や強烈な色彩の影響(七人グループの場合)を受けているのである。

七人グループ以後の数十年間は、カナダの芸術にとって画期的な国民意識高揚期となつた。ちやうどイギリスのエリザベス朝時代、あるいはアメリカのウィリアム・ジェームズ時代と同じである。カ

ナダはカナダなりに、独自の道を通つて、他のいずれの国とも違つた国(ネーション)になつたのだ。政治家が古くさい十九世紀的な民族国家にまとめ上げようとして失敗した地方社会が、連邦という形で寄り集まつた独自の国にである。ノースロップ・フライが「いみじくも呼んだ」開拓時代の「要塞」社会は、すでに歴史の中に消滅し、われわれは漸くこの風変わりな土地を理解し、愛するようになった。

芸術家たちの個々の動きは、たしかに国の文化の豊かな発展につながる。だがそれは政治的なナショナリズムとは一致しない。だからこそ逆に、ナショナリズムというものがカナダ人のもつ真の天才からいかにかけ離れたものになつていけるかがわかるのである。カナダ人のもつ天才とは、カナダの歴史における二つの基本的事実にもとづいている。すなわちカナダが多種類の伝統をもつ国であり、かつまた移民とその子孫の国であるという動かしがたい事実の上に立つて発揮されてきたものである。単一のカナダ国家というものは存在しない。

カナダの最も中央集権的政治家でさえ、われわれが名称だけでなく、精神的にも現実的にも連邦(連合体)であることを認めざるを得なかつた。カナダの芸術家は、喜んで外の世界を探検してきた。また利益の源泉としての外界が提供するものを熱心に受け入れてきた。そのことに彼らは、ナショナルではあるかもしれないが、ナショナリズムとは程遠い天才を発揮してきた。

だがわれわれは、次のようなナショナルリズムの特性を見逃すわけにはいかない。すなわちナショナルリズムのもつ排他性と権力構造への妄執、地方的なもの、個的なものを犠牲にした上での全体の主張、集団の中へ個人を埋没させる傾向がそれだ。あらゆる国家の政府は、それが唱へるナショナルリズムがたとえどんなに穏健で非好戦的であろうとも、これらの特徴をある程度はもっている。もちろん、それは上述したような、カナダ人のもつ天才とは正反対のものだ。現在政府がとつて一時的な党派志向がどうあれ、カナダ政府もこの一般原理の例外ではない。

最近広がりつつある文化官僚制は、カナダにとって大切な外国との連続性存在にマイナスの作用を及ぼしている。カナダ文化の形成期には、他国の場合と同様に、芸術家や芸術愛好者が外国文化との永続的で実りある接触を通して認識を培い、美的表現方式を広げてきたのであるから、文化にとってこの外界との連続性が、いかに大切かは明らかであろう。ここ数年の間にカナダ社会が不健全な内向性へ傾斜しつつある理由の一つに、このような官僚制の存在や、芸術家を判断するに創造力よりも出身国をもつてするようなナショナルステイックな傾向がないとすれば、まことに幸いである。

(artsCanada, 一九七九年十二月/一九八〇年一月号掲載の記事より抜す)

トロント美術界に旋風を巻き起こした

十一人の官能的抽象画家たち

トロントが長い眠りから目覚めたのは一九五三年、「ペインターズ・イレブン」(十一人の画家)がまとまった一派として、初めての展覧会を開いた時からのことである。ペインターズ・イレブンは、ぬくぬくとした居心地のよい居間の中にあつて冷たい不穏な嵐のような存在だった。

当時、トロントの美術界はいわば倦怠感の中にとっぷりとつかっていた。その中でモントリオールとはきわめて対照的だった。モントリオールでは「モントリオール派」の誕生以来、やゆ、嘲笑や自己主張の叫びが周囲を圧していた。既制芸術への反感を内部にうっ積させたトロントの若き孤高の急進画家たち——かれらはモントリオールを羨み、画廊を画家個人の好むままに戦慄の間や歓喜の場所に変わるモントリオール美術界の「イズム」(主義)を羨んだ。

ペインターズ・イレブンが誕生したきっかけは、一九五三年のある晩、トロント繁華街のデパートである集まりであった。このデパートでは、室内装飾の一つとして多くの地方画家の描いた抽象画、非具象画を飾り、PRのために写真をとらせたのである。この時集まった画家の

一人が全員で展覧会を開こうと提案した。具体的な手筈を検討する会合が、オシャワ(トロント近郊)近くの湖畔にあるアレクサンダー・ルークのアトリエで持たれた。たまたまその中の一人が、この会合に運命的なものを感じ、彼らがいま分水嶺を越えようとしていることに気付いて、この騒々しい談論風発の、ときにまとまりを欠いた議論を、テープに録音している。

内部のリーダーはオスカー・ケイヒン。



Harold・タウン作「二ネベの四つ角」 The National Gallery of Canada, Ottawa

彼は三年後に自動車事故で悲劇的な死を遂げている。会合に出席した中で、年長の画家達をあげると、ハミルトン在住の永遠の実験家ホーテンス・M・ゴードン、商業美術家として長年働いたのち前年に

急進画家として再出発したジャック・ブッシュ、オンタリオ美術大学の教師で、その革命性ゆえに時々同僚を悩ましていたジョック・マクドナルド。若手ではトム・ホジソン、ハロルド・タウン、カズオ・ナカムラ、レイ・ミード、ウイリア



グループ・オブ・イレブンの仲間たち。

ム・ロナルド、ウォルター・ヤードウッドがメンバーである。全員が、当時行なわれていた万人向けの全国絵画展や地方絵画展に出品していたが、今回初めて、上品に落着いた保守的な都市トロントで、徹頭徹尾抽象的、非具象的な展覧会の自主開催を敢行したのだった。

ペインターズ・イレブンの第一回展覧会は、一九五四年二月に、トロントのロバーツ画廊で開催された。二週間の開催期間中、同展を訪れた観客の数は、この画廊始まって以来の記録的なものだった。若い地方画家達は興奮したが、既成の画家は嘲笑した。売れた絵はほとんどなく、批評家は全く無関心か、せいぜい軽い関心を示したにすぎなかった。それから二年の間にグループの絵画展はオンタリオ

州各地で開かれたが、これは主として熱烈な支持者の支援によるものであった。ところが一九五六年四月に、ペインターズ・イレブンは、毎年行なわれるアメリカ抽象画家展の招待出品者としてニューヨークへ招かれることになった。アメリカの批評家は彼らの作品を絶讃し、ニューヨークの商業画廊で個展を開くに至った者も何人か出た。ウイリアム・ロナルドなどは、その結果ニューヨークへ永住してしまった。

アメリカの新聞に現われた讃辞を耳にするにつれ、カナダ人もついに彼らの業績に強く印象づけられたのだった。ちょうどモントリオール派がパリっ子達の関心をひきつけたのと同じように、トロントの革命画家はニューヨークと深い関係をもつに至った。この二つのグループは、向いている方向は違っても、共通の闘いをやっていることをよく承知しており、



ウィリアム・ロナルド作「綠色火花」 The National Gallery of Canada, Ottawa

一九五八年にはトロントで両派合同の展覧会を開いた。ペインターズ・イレブンのキャンバスの横に、ベルフルール、ホルデユア、デユムシエル、イーウエン、マッキューウエン、ペラン、ピッチャー、リオベル、トナクールといったモントリオール派の面々の作品が並んだ。これらの若い画家の間に革命と献身の確固とした前線が築かれたことは、カナダ絵画史の上でもきわめてユニークなことである。

ペインターズ・イレブンの基調である抽象的表現主義には、フランス語系モントリオール派に見られる民族的熱情が欠けている。彼らが特に関心をもったのは、



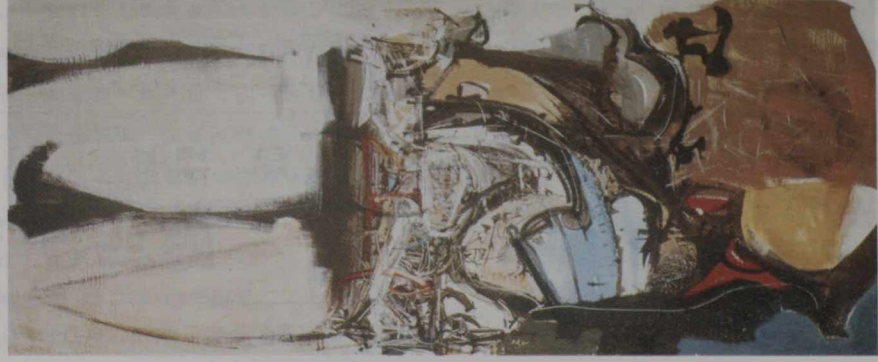
カズオ・ナカムラ作「山脈」 The National Gallery of Canada, Ottawa

官能的生活である。オスカー・ケイヒンの打ち出した調子は、グループ多数者の共通分母ともいえるものだったが、グレイの地に色彩を散らした彼の抽象画などを見ると、豆のさやがはじけるといった自然の結実と関連した現象に啓示を受けているように思われる。芸術表現の領域では恋愛やセックスが依然として大事な役割を果しているが、トロント派ではこれが官能的な形で現われる。モントリオール派でいえばペランの傑作に見られるのと同じ傾向だ。トロント派には、恋愛以外の人間の情動を主題とした画家も二、三いたが、アランのもつ純粋なリネズムはトロント派にほとんど見られない。

イレブン派の中で最も特徴のあるのは、あの不遜な画家ハロルド・タウンであろう。極端な自己吹聴癖、天才、派手なシヨーマンシップなどが重なりあつて、独特なパーソナリティを形成している。新聞の見出しに何度も顔を出すのも、そのせいだ。うわべの騒々しい陽気さの陰には、砥ぎすまされた感性が隠されていることが多い。タウンはトロントの伝道者にふさわしく、芸術家は自由に自己を表現しなければならぬと説いて回り、そつげなく性急に、怒髪をふり乱して、伝統のくびきからの解放を闘っている。想像力に満ちた彼の精神は、周囲の環境を素材に革命的作品を生み出す。たとえばいくつものきちんと構成された、独創的な作品シリーズは彼の身の回りの環境から生まれたものだ。街の通り、交差する高速道路、陸橋などが、白をバックに暗い迷路

のように描き出されたりする。また、北欧のバイキングや東洋のモチーフを使った一連のすばらしいシール(飾り切手)は、ロイヤル・オンタリオ博物館でヒントを得た作品だ。カラーシユの傑作「カレリーに捧ぐ」は、同博物館創設に尽力した人物をたたえて作ったもの。題材にはバックス祭あり、風景あり、スペインのドンファンまである。

タウンのトロントへの固執は、ほとんど盲信ともいえるほど強いもので、ほん



ハロルド・タウン作「静水の舟」 The National Gallery of Canada, Ottawa

の短期の旅行にもトロントを離れるのを嫌った。彼は自分に必要なのは一つだけだと言いつける。一つとは、自分の住む周囲の環境の中で変化していく現在の生活と、ロイヤル・オンタリオ博物館で発見したような古代である。タウンは時代の寵児、アリアドナであり、同時に芸術の巨匠である。空想力を刺激するものであればどんな媒体でも作品化し、展覧会場を庄する大型の絵でも、色の素晴らしいシルクスクリーン、エッチング、カラーシユあるいは彫刻でも同じように自由になす。

ペインターズ・イレブンの大多数に本

質的な特徴として、燃えるような色彩の華麗さがある。ジャック・ブッシュの巨大なキャンバスは淡々と描かれてはいるが、その単純で圧倒的な色彩部分は抗しがたない魅力をもつ。抽象表現派のトム・ホジソンは、デクーニングを思わせる精神的な筆致で形を描く。イレブン派ではないがこれに近いカウトリーは、ヌードを描く場合など、造形的要素がホジソンより強く出る。カウトリーにとって絵を描くことは一種の官能的行為であり、したが

って自分の芸術に個人的に埋没する傾向をもつ。それに対してホジソンの絵は、絵の具をたたきつけるという行為そのものに肉体的エネルギーを発散させているように思われる。このほか、ペインターズ・イレブンの興した傾向を追う若い画家には、星雲に似た抽象画の傑作を描くヘドリック、鮮やかな色彩のメレティス、実験的なゴーマンなどがある。ペインターズ・イレブンは一九六〇年に解散したが、その偉大な影響力は、いまだにトロントの美術界に続いている。(Painting in Canada, by J.Russell, University of Toronto, Press 1966 より抜すい)

カナダへの定住を人にすすめられ、一時は迷ったものの、結局踏ん切りがつかず、日本へ帰国——そういう惑いの時期が、私にもあった。わが三十代後半のことである。踏ん切りがつかなかったのは、根（ルーツ）の問題がからんでいたからである。私は、自分とはかくとして、家族にまで、日本に下ろしている根を引っこ抜き、それをカナダという異質社会に植え変える苦しい作業を強いる気には、どうしてもなれなかったのである。あるいは、この家族云々というのは、たんなる口実だったのか。ほんとうは、自身自身の根の移植に自信がなかった、ということだったのかもしれない。とにかく私は帰国した。このときの私の選択の当否を、いまここで問うまい。ただ、私はその後、たえず「根」の問題——それが人間にとってもつ重要性——を意識しつづけるようになった、ということだけはいえそうである。

オタワ在住のA君のことを考えるたびに、私は自分の人生におけるこの惑いの時期と、そのときの選択とを想起しないわけにいかない。A君は、私と異なった選択をしたからである。彼は、自分の根などに拘泥せず、カナダに定住する道を選んだ。私とA君は、戦後、同じ時期に同じ大学を卒業しているのだが、知り合ったのは、一九六〇年代始めのオタワだった。しかし何といても、日本の戦中戦後の共通経験をもつ同じ世代。話がツーカーと通じる気安さもあり、かなり親しく付きあうこととなった。その後オタ

ワを去った私と定住を決意してオタワに居残ったA君は、しばらく賀状の交換くらいはしていたが、それもいつしか途絶えてしまった。

昨秋、十数年ぶりでオタワへ舞い戻った私は、このA君を思い出し、同君がまだオタワに在住していることを確かめ、電話を入れてみた。突然の電話にA君がすぐに私を思い出せなかったのは、別にふしぎでなかったが、私をもっと驚かせたのは、同君の徹底した「日本離れ」だった。最初は、日本語もろくに通じないのである。それでも話しているうちに、同君の現況や身辺の事情が、おぼろげながら分かってきた。A君はカナダへ来て

外国生活と「根」の問題

平野 敬一

きてみた。結果は案じていた通り。かんばんしくないのである。A君は、対人的にも、仕事の上でも、うまくいっていない、とその上司は卒直に教えてくれた。あるいは何か個人的な事情があるのかも知れず、それ以上具体的なことを聞くのを私は控えたが、A君は自分の「根」を否定した当然の報いを受けているのではないかと、という思いを私は抑えることができなかった。なにか大事なものが枯渇して、カナダというこの包容力ゆたかなモザイク社会にすら適応しえなくなったのではないかと。そんな思いがした。

私の連想は、A君から、昨年ニューヨークで会った若い日本の商社員B君へと飛ぶ。日本の大企業に所属するB君にはアメリカ定住などという気持はさらさらない。もちろん自分の「根」を否定する悲壮さも持ち合わせていない。それどころか、その「根」から、どんらんと思われるほど、日々に養分を吸収して当然だと心得ている。

B君の勤め先には、日本から直行便で日本の新聞が毎日入るようになっていて、もちろんB君はそれを精読する。したがって、かつて辺島で筆者を悩ませたような「情報の枯渇」にB君はまったく縁がない。巨人軍の江川投手が目下何勝何敗、といったような雑多な情報にまで通じ

ているのである。せつかく外国生活を送る機会を与えられながら、これでは日本にいるのと変らないでないか、もつたない話だ、と慨嘆するのは、私のような年配者の感覚であって、B君はB君なりの流儀で、充分外国生活にわけこんでおり、アメリカ人相手の仕事にも着々と成果を上げているようだった。B君は日本からの情報をたっぶり吸収しながら、それをエネルギー源にして（ポパイのホウレン草の如く）、仕事をしている感じだった。とにかく生きがいなのである。

私はB君をオタワ在住のA君の場合と比べてみないわけにはいかなかった。とかく悲壮になったり、感傷的になったりする傾向の強い私の世代に属するA君と、万事カラッとして感傷抜きに割り切れるB君との世代の違い、ということになるのかもしれないが、自分の「根」からの養分吸収を拒否した特殊なケースと、どんらんに養分を吸収しているケースとの違い、ということにもなりそうである。

外国生活を送る形としては、A君の行き方もB君の行き方も、それぞれ極端に走りすぎているのかもしれない（黄金の中庸はその中間か？）。しかし、無理がないという点で、私には、まだしもB君の行き方のほうが健全であるような気がする。人間、自分の「根」を否定していると、正体不明のノン・パーソンになりかねない。どんな社会でも、こういう正体不明人を、あまり歓迎しないのではなからうか。なにもカナダに限らない。

（東京大学教授）

カナダ——文学と風土

対談 ● ジャック・ホッジンス / 西本晃二
(作家) (東大助教授)

西本 今日ではカナダ文学についてお話を伺いたいと思います。先日お聞きしたホッジンスさんの講演の中で私が一番興味深く思ったのは、カナダ文学では自然に対して大変強い親近感を持っているという点です。日本文学の場合もやはり自然——日本の自然ということですが——に対する親近感是非常に強いものがある。そして私達が海外に行った時も、やはりその自然に大いに魅了されるのです。そこで、自然がカナダ文学の一部ともなつたのはどうしてなのか、その辺の所からお聞きしたいのですが。

ホッジンス 確かに、カナダ文学における自然の重要性は、過小評価できないと思います。日本文学もこの点で同じなわけですね。その一つの理由は、カナダではどんな所でも、たとえカナダ随一の大都市であっても、そこからほんの少し離れた所に行けばほとんど無人の自然、未開地が広がっている、ということにあると思います。

日本文学とカナダ文学の決定的違いは、その自然の性格にあります。日本文学における自然は、人々が非常に親近感をもっている自然といつてよいと思います。

これは両国の国土の違いでもあるのですが。日本では、自然と人間との間に、互いに相手なしでは存続しえないといういわば共生関係があります。これはもちろん、文学だけでなく、日本人の生活信条においても重要な位置を占めていますね。それに対して、カナダでは、自然は人間より先にそこにあり、厳然として君臨する存在だったので。多くの地域では、自然とは非友好的で、きわめて危険な存在です。

文学の中で見ると、人間対荒野、人間対自然の対立構造となって現われます。

人々は寒さで凍え死に、深い山で道を失ない、あるいは切り立った岩山から墜落する。自然が——あるいは一種の自然といった方がいいかもしれませんが——親近感ある存在として把握されるのは、おそらく十九世紀のカナダ詩人、それに比較的最近の詩人のロマン主義の中だけです。ただ、ブリティッシュ・コロンビア州の作家は例外です。カナダで自然を敵対的存在と感じない作家は、彼らだけでしょう。ご存知のように、B・C州では自然は敵対的でなく、とても住みよい気候ですからね。そこでは人々は、エミリ

ー・カーに見られるように、未開地の中にどんだん入って行きます。マーガレット・アトウッドの作中人物みたいに恐れたりはしません。むしろ未開の中に、神との関係を、あるいは宇宙的なるものの精神を見るのです。

西本 確かに日本の自然は、カナダとくらべて優しい、親しい性格に思われるでしょうね。しかしそれも表面においてのことであって、日本には台風とか地震とかいった自然現象がある。自然は時としてまことに危険きわまりないもの、われわれに大いに敵対するものとなるのです。自然は人間を時々打ちのめすものだという感情を、日本人はもっている。だからわれわれは自然を征服することよりも、自然と共に生きようとするんですね。ホッジンス なるほど。

西本 アメリカ西部のいわゆるフロンティア文学には、この自然征服の衝動がよく見かけられるのですが、私が思うにカナダ文学の中にも時々見られるんじゃないでしょうか。

ホッジンス ええ、大いにありますよ。カナダの特徴、カナダ文学の特徴をいうと、人間はよそ者だということです。カナダではあらゆる人間は風景にとってよそ者であり、だから自然との関係を自分から見出す必要があった。そこでフロンティア社会がまず最初にしようとしたことは、未開地をいわば飼いなすことだった。

イギリスのよく飼いなされた小じんまりとした地方からやって来た人々の最

初の衝動は、この未開地をもう一つのイギリスに作り変えることだったんです。あの素敵な、手入れの行き届いた小さな庭のあるイギリスにです。しかしそうすることが人間の自然の性向だとは、私は思わない。むしろそこに働いたのは、予測しがたいものに対して人間が抱いた恐れだと思っています。

日本には地震があり、台風がある。カナダには地震や台風みたいに激しい自然現象はありませんが、でも冬がある。地方によっては、日本の地震にも劣らない恐ろしい冬です。そこで、人々はどうするかというと、垣を作り、小さくて素敵な四角の囲い地ときれいな小さい庭園を作つて、イギリスにいるような気分にするのです。これはもちろん一般論ですが、カナダ文学に現われている見逃せない特徴です。

西本 宗教的な態度との関係はどうですか。われわれの例でいうと、日本は大体において仏教国といつていい。きわめて日本的な仏教ですが。そして仏教思想の一端として、いわゆる輪廻思想を持っています。生まれ変わる、ということですね。たとえば私は前世においてカエルだったかもしれない。そしてこの世で人間となつた後、来世はまた別の存在に変わるのだという考え方です。このような考えからすると、人間と人間以外の存在との間には、さほど厳格な違いがなくなってくる。ところがキリスト教はそうではない。旧約聖書創世紀の冒頭で厳格な區別を行なっている。神が言っています。



ホッジンズ氏



西本晃二氏

万物は人間のためにあり、人間は他ならぬ神をかたどって造られた存在であると。ホッジンズ カナダには基督教の伝統がいろいろあります。支配的な影響力をもった宗教思想とはいえば、現実の信徒数とは一致しないんですが、プレスビテリアンというかプロテスタント的な考え方、つまり人間は労働によって救いを得るのだという考え方でしょうね。そして労働とは、カナダの場合、この荒涼とした国を有益な、別のものに変えることを意味したんです。そこで人々はヨーロッパ各地からやって来た。中でもプロテスタントは、この国にやってきた目的を、この未開の地を富を産む土地に作り変えるため、人間の運命の改善が可能な土地に作り変えるため、と思っていたんです。

西本 カナダではそうしたことがまだ可能なのかもしれない。ですが世界的に

見てどうでしょうか。たとえばエベレストはすでに踏破されている、アメリカの大西部は開拓し尽され、フロンティアは消滅している。そういう中で、先程おっしゃったような考え方は今後も意味をもつかどうか……。カナダの人は、全般的に言って、無限の可能性があったのは過去のことすぎないということ、まだ感じ始めてないと思われるのですが、どうでしょうか。

ホッジンズ 確かにカナダにはまだまだたくさん土地がある。まだ誰も住みついてない土地がたくさんあるように見えるから、限界など一切ないようなふるをすることが可能なんだともいえます。国民の大半はアメリカとの国境に沿った限られた地域に住んでいる。だからそれが正しいか否かは別として、われわれには征服する余地のある土地がまだ何万、何十万平方マイルも残っていると考えerのです。

西本 しかし作家はどうですか。現代文学の一般的傾向として、作家は外の世界と内なる世界との間に一種のバランスを打ち立てようとしていると言えますが。

ホッジンズ カナダ文学は、やっとなの段階までたどりついたと言えます。カナダではつい最近まで、文学が単なる事物の紹介に終わっていたんです。カナダは何と言っても、書物に書かれたことのない真新しい国です。そこでは事物を紹介することが最初の仕事となります。風景を書き込み、林や森を描写し、湖や

都市を初めて本に登場させる仕事です。だが今日、作家達はその必要はないと思ひ始めています。カナダの風景はすでに紹介された。今度こそ文学の本当の仕事にとりかかることができる。つまり風景ではなく、人間を描くという仕事です。人間であるということとはどんなことなのか、もうわれわれは書くことができます。日本文学ではすでにこの面で立派な業績をあげている。

西本 その点からいうと、カナダ文学はある意味で非常に若い文学だと言えますね。だが他方で、われわれ日本人としては、カナダ文学のもつ可能性を羨まざるを得ない。未知のものがあるという……。

ホッジンズ その通りですよ。カナダ文学は、現在わくわくするような時期を迎えています。とくに私にとつてはそうなんで、私の住むバンクーバー島というのはこれまで文学には全く登場してない。とりわけ私の関心の深い小説（フィクション）の分野で全くの処女地といつていい。だから、私がたとえば一本の木を登場させるにしても、その木はこれまで世界中の物語に一度も登場したことの無い木のことだつてよくあるわけですよ。私はアービュータスという木の林の中に住んでいるんですが、このアービュータスというのはバンクーバー島周辺二〇マイルの範囲にしか生えていない木です。変種は世界各地にもありますがね。でも非常に特殊な木なんです。というわけでアービュータスの木をただボンと書くだけ

では、私が何を言おうとしているのか読者にわかってもらえない。だから目下のところは、処女地を書くということは、私が自分一人の力で世界中の人にアービュータスの木が見えるようにしてやらなければならないわけで、大変エキサイティングなことだと思います。

西本 つまり創造ということですね。ホッジンズ 一つの創造です。もちろん危険なことです。私は時々バンクーバー島全体が私のために存在するのじゃないかという気がしてくるんですから。まるで私がその所有主みたいな感じですよ。

西本 他方でこういうことがいえますか。もしホッジンズさんが作品の中でカナダを描いたとする。そうするとその作品はカナダ文学として立派に通用するわけですが、しかしそれだけでは十分でない、とあなたはお考えになる……。

ホッジンズ こういう風に言いますよ。まず最初に木や森や事物を語る。だがその次には人間を語る作業がこなければならぬ。それからこれは是非わかつてほしいんですが、カナダでは「カナダ小説」を書くことするのはとても無理なことです。カナダという国は非常に広大で多様な国ですから、そんなことをしようとすればまるでこつた煮になってしまう。つまり、誰にとつても何の意味ももたない作品ということですよ。

このような難しい状況に対処する唯一の方法としては、次の方法をとる以外にないでしょうね。とり上げる地方のことをまずきちんと書き、それからその人

の関心の的である人間を書く。そしてそれらの人物が読者に理解され、愛されて、始めてその作家は単なる地方作家から全国的作家——言葉は何でもいいんですが要するに普遍的存在を書く作家——になるのだと思います。

ですから私がカナダ小説を書いていると単純にお考えになると、大きな間違いを犯すことになる。そんなことは不可能だからです。トロントの作家が、トロントはカナダだからカナダ小説を書いているのだと、欺瞞的に思い込むこともあるでしょうが、現実には、外の人間にとってトロントは他所の土地にすぎない。だから、作家はその土地を理解させるには技量を使い、そこに住む人々を理解させるには心を使うことが大切なのです。

西本 その点で現在成功している作家または詩人の名前を何人があげていただけませんか。

ホツジンス すぐに思い浮かぶのは、オンタリオ州出身の素晴らしい短編作家アリス・マンロー、平原地方出身のすぐれた小説家マーガレット・ローレンス、東部沿岸の詩人オールデン・ノーラン、バンクーバーの詩人アール・バーニーといったところでしょうか。ほかに平原地方の小説家ロバート・クロッチもあげていいと思います。

それから誰よりも先にあげるべき作家として、ルデイ・ウィープがいます。アルバータ州の小説家で、カナダの歴史を自分のテーマとしている人で、平原地方の歴史の中から、ビッグ・ベンとかルイ

・リエルのような人物を好んで書いています。ビッグ・ベンというのは白人との和平協定調印を拒んだインディアンの酋長、リエルは有名な反乱の指導者で、最後は絞首刑に処せられた人物です。こうした一見、歴史小説を書いているように見えながら、ウィープという作家は世界全体のビジョンを、あるいは人間のビジョンをそこに投影している。そのビジョンというのは宗教的でもあり、普遍的でもあるきわめて深みのあるものです。ウィープ自身、自分の狙いは大きい、北米のトルストイになるつもりだ、と公けの場で言ったことがあります。

西本 そりゃあ大変だ。

ホツジンス カナダには、大胆な作家が何人かいて、自分はちっぽけな文化から生まれたが、自分が相手にするのは全世界だと自負しているんです。だからとてつもない失敗作もあれば、いくつかの成功作もあるわけです。でも、危険があればこそ、面白いと言えるんじゃないでしょうか。

西本 そう、もちろんそうでしょうね。フランス系作家では、どういう人があげられますか。

ホツジンス フランス系作家にも、前に言った範疇の人が何人かいます。ロック・キャリエなどは、私の個人的に好きな作家です。村の生活を書いた彼の小説はいいですね。私自身が村で育ったせいもありますが、フランス系でもカトリックでもない私にも、彼の小説の中の事はよくわかります。劇作家のミシエル・ト

ランブレイも素晴らしい。彼の作品は世界中で上演されてしかるべきですよ。彼の場合、非常にカナダ的、ケベック的なんですが、大変すぐれた劇作家ですから。西本 カナダにはフランス系とイギリス系とが共存するという状況があるわけですが、ホツジンスさんは、この共存が文学を豊かにする上で役に立つとお考えですか。ホツジンス ええ、確実に役に立つてきたと思います。フランス系カナダの作家から見ると、自分が、孤立した文化の担い手だと常に意識させられてきた。自分が今これを書きとめておかなければ、

ホツジンス氏の横顔

バンクーバー島の木こり村で生まれ、そこで育つ。同島ナナイモの高校で英語教師を勤めたかわら、小説を書き続ける。四十一才。主な作品に、Spit Delaney's Island, The Invention of the World, The Resurrection of Joseph Bourne など。バンクーバー島にある架空の村ポート・アニーで起こる奇妙なできごとを扱った The Resurrection of Joseph Bourne (ジョセフ・ブーアの復活) 写真で、今年のカナダ総督文学賞(フィクション部門)を受賞している。



消滅してしまうだろうという、一種の危機意識を持たされてきたんですね。だか

らこの点で共存は立派に役立っている。一方、英語系カナダ人ですが——現実とは違ったニュアンスがあるんで、イギリス系カナダ人という言葉を使いたくありません——英語系カナダ人は、自分と同じ言語を使う圧倒的に巨大な文化と隣り合っているという意識、だからもしこれを書きとめておかなければ、消滅してしまうだろうという似たような危機感がある。われわれは——文化的に言うと英語系カナダの作家はということですが——アメリカに対して、ちよどケベックの作家がイギリス系カナダに対して抱いているのと同じような感情を持っているんです。先程言った危機意識ですね。作家を創作に駆り立てている衝動の一つは、こうした切羽詰まった願望じゃないでしょうか。文化が消滅する前にそれをしっかりと真の上に残しておきたいという……。西本 これまでのお話から申しますと、いろいろ困難な状況があるにもかかわらず、カナダの作家は生き残る可能性について非常に自信たっぷりですね。ホツジンス まあ、若君のもつ傲慢かもしれません。傲慢と言ったのは、前向きの意味であって、愛すべき高校生によく見られるような無邪気な傲慢さです。他を軽蔑する類いの傲慢さじゃない。世界は自分達のもの、今後も自分達のものだという絶対的信念——そうした希望を依然として持てるだけの若さがあれば、誰でも当然そのような意味で傲慢になるんじゃないでしょうか。

学校、英語でいえばスクールという言葉の語源にあたるギリシヤ語のもととの意味は「レジャー」だそうである。

日本の子供たちにとって、学校での勉強は、大学入試競争という、行く手の地平線にたちはだかる暗雲におびやかされながらの重苦しい時間の連続であり、のんびりと物を学び物を知ることとは、およそ縁遠いように思われる。

もちろん、子供たちというのは、その胸のうちに、つぎることのない生へのよろこびの泉を秘めているものだ。学校という時間と空間をみたしているのは、やはり子供たちのたのしく明るい笑い声であることを、私はあくまでも信じたい、祈りたい。しかし現在の日本の学校教育制度の下で、いたいたい幼い犠牲者が数多く出ているのも事実である。受験勉強という枠が強制的に定義する「必要な知識」を学び記憶する能力が、他の子供たちにくらべて少しばかり劣っているというだけで、ある場合には死へすらも追いやられる子供が、ただの一人たりともあつてはならないことは、誰の心にも明らかであるはずであろう。

私の研究室の若い研究者Tさんは、二年まえの五月、奥さんと小学一年生の坊やS君をつれてエドモントンにやってきました。学校のこと、学令期に入った子供さんをつれてカナダにやって来る日本人研究者の家族にとって大きな悩みである。親だけではない。子供さん自身もあれこれと小さい胸をいためるにちがいない。何よりもまず、言葉の問題がある。まる

っきり言葉のわからない学校に行つてどうしたらよいだろう。授業はわかるだろうか。勉強ができるだろうか。お友だちなんか、とてもできないのではあるまいか。

ともあれ、何をさておいても、学校にだけは一日もはやく通わせなければ、という日本人の親らしい判断で、アパートに落着くのもそこそこに、近所の小学校へ出かけて校長さんに面会して入学の手

エドモントン便り 「スクール」と「レジャー」

藤 永 茂

続きをする、ということになる。

私と家内は、Tさん一家に同伴して、もよりの小学校のパーキング場に車を停めた。それまで不安そうに黙りこんでいたS君は、急に「みんな行っておいで。ぼく車の中で待ってるから」としづつていたのだが、なだめすかして校長室へ。受付けてくれた秘書も校長先生も、こうした場合の経験は十分。その打ちと

け方も、親しみの表現も、よくつばを心得ていて、S君の不安な気持も大いほぐれたようであった。

校長先生が父親に向かつて、「ほんとによい子だねえ。そうだろう、Tさん」と持ちかけたのを受けて、Tさんは、「いやあ、この子は、どうもバッド・ボーイで」

と答えてしまった。これにはさすがの老練校長も一瞬絶句。わがいとこの愛妻、自慢の愛息を、愚妻、豚児と呼ばねばならぬ日本男児の悲哀よ、と突沸してくるおかしさをかみころすのに、私も一苦労することになってしまった。

そのS君、今は学校の英語に何の不自由もなく、勉強はよく出来るし、その上アイスホッケーの選手にまでなつて、カナダの小学校生活のたのしさを満喫している。この二年間に、からだもこころもすこやかに見事に成長したS君を見てみると、「スクール」がもつともよい意味での「レジャー」でもあり得ることを信じたくなつてくる。

Tさん一家の場合にはけつして例外的にハッピーなケースというわけではない。私の見聞した限りにおいて、日本からやつて来た子供さんが、こちらのスクーリングで、つらいみじめな思いをした例を知らない。大学受験の重圧の存在しないカナダの社会の中で、小学校や中学校が日本のそれとくらべて、子供たちにとって気楽な学びの場であることは否定の余地がなさそうである。

しかし、ほめつばなしも無責任というものであろうから、こちらの学校の思わしくない面も紹介しておくことにしよう。私のよく知っている子供で、父親は色の黒いメキシコ人、母親は白人の兄妹がある。二人とも母親の血がまざったのか、髪はブロンド、肌の色も白く、私の目には両親とも白人の子供と区別がつかないように思われるのだが、母親の話では、小学校で人種的にいびられるという。人種偏見というものは、何ともやりきれないものである。もう一つ。最近のエドモントンの新聞によれば、小学校五年生の女の子の父親が、学校で始まった自由選択コースのキリスト教宗教育の時間に子供を出席させなかったために、その時間の受持ち教師（牧師の奥さん）とクラス・メイト総ぐるみのいやがらせに苦しめられた事件もある。日本とは少しちがつたいびられ方がカナダにはあるというわけである。

国際児童年（一九七九年）は過ぎてしまったが、子供たちの世界をたのしい明るさにみちたものにしよと努力は、そのまま、この世界全体をより住み良くすることに繋がっているものであり、大人たちの社会のみにくさが、たちまち子供たちの世界を暗くするのだということをお忘れなさいたいものである。

（アルバータ大学教授）

ご愛読いただきました藤永先生の「エドモントン便り」は今回で終わります。次号から別の連載を予定しています。

ドリス・シヤドボールト著

「エミリー・カーの芸術」

東京都立武蔵高校教諭 浅井 晃

バンクーバー島の南端にあるビクトリア市は、風光明媚、その英国風のたたずまいで観光客を集めているが、バス発着所から歩いて数分のところにあるエミリー・カーの家を訪れる人はまれである。蠟人形館やエンプレス・ホテルで時間をつぶす暇があつたら、ぜひ訪れたいところである。



エミリー・カーは、一八七一年、英国人移住者を両親としてこの地に生れた。ビクトリア朝仕込みの

専制的父親の血を受けたとされる未娘のエミリーは、大ぜいの姉妹の中にあつて、ただ一人いこしな反逆児であつた。

彼女は、近くのビーコンヒル公園で遊んでくれた母親とは十四歳して死別し、二年後には父親をも失つた。絵の好きな彼女は、一番上の姉の支配する家を嫌つて、十八歳の時サンフランシスコに修業に出かけた。小さな美術学校で三年余り学んだが、ヌードモデルの写生を拒否して逃げ出すという娘だつた。

帰国後も家族としくりかず、子供に絵を教えて貯めた資金で英国に渡り、

主としてロンドンで学ぶが、結核にかかり、渡英五年にして、失意のうちに帰国するのである。

このあたりまでについては、多少の誇張はあるが、自叙伝と言われる「*From Boy to Girl* (苦難の修業時代)」（一九四六年）に詳しい。彼女は文才にも長け、画家としてよりも作家として先に有名になつた。第一作の「*Tree Man* (クリー・ウイック)」（一九四一年）は、インディアンの交流を描いたもので、ノンフィクション部門でカナダ総督賞を得ている。

これらの著作は、心臓病を病んで写生旅行が困難になり、絵筆を持つことすら医者に禁じられた晩年の、やむにやまれぬ創作活動であつた。そして自叙伝の発刊も、第二次世界大戦の終戦も待つことなく、一九四五年春、孤独のうちに七十四歳の生涯を閉じたのである。

彼女の絵の多くが、今カナダ東部にある。保守的な土地柄だつた西部では売れなかつたからだ。トロント郊外のクラインバーグの森を訪れるとよい。山小屋風のマクマイケル美術館に、トム・トンブソンをはじめとする七人グループの作品に混じつて、彼女の、たとえば海に臨むビ

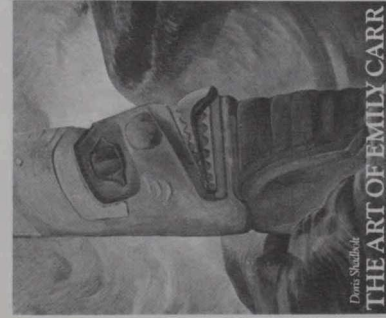
ーコンヒルの丘の絵を見ることが出来る。

またバンクーバーやビクトリアの美術館（彼女の時代には無かつた！）を訪れば、歯をむき出したビーバー像や、帯状になつてのたうつ森を描いたキャンバスを見ることが出来るだろう。

しかしながら、今度、個人所有の多くの作品も含め、カナダ各地に散らばつてある作品が、二六センチ×三二センチ、二百二十三ページの大冊にまとめられて出版されたことは、彼女の芸術の全貌を一時に鑑賞するという大へんな贅沢を可能にしたのである。

著者のドリス・シヤドボールト女史は、単なる美術批評家ではなく、トロント、オタワ、バンクーバーなどの美術館に歴任し、各種の芸術擁護団体のために献身する美術の専門家で、エミリー・カーの良き理解者である。

この大著のなかで、彼女はまずエミリーを生んだビクトリア、ひいてはカナダ太平洋岸の十九世紀後半の情勢を紹介し、ついで画家としての彼女の成長を、初期から終期まで九つの時期に分け、百五十枚の原色版、六十枚の白黒版複製画を用いて説明している。



エミリー・カーを知らぬ人も、ページをめくるにつれ、その異常な生気を発する芸術のとりこになることは必定である。

エミリー・カーとインディアン主題との出会いは、一九〇五年、イギリスからの帰路、カリブー地方を旅行した時に始まる。サンフランシスコやロンドンへの遊学は、都会的なものへの嫌悪を強く彼女に植えつけていた。それはかりではない。イギリスから見たカナダは植民地にすぎず、カナダ人は「植民地人」と呼ばれていた。

イギリスの保守的な画壇からも多くを学ぶことができなかつた彼女は、帰国すると、カナダの自然と、カナダの先住民インディアンの世界の中へ、急速にのめり込んで行く。インディアン部落、トーテム・ポール、ハウスポストなどを、憑かれた者のように描きつづけるのだつた。

しかし、内に神性を秘めたインディアン芸術に対しながら、彼女は自分の技法の限界を感じた。そこで一九一〇年、フランスへ学びに出かけることになる。そこには、まさに二十世紀にふさわしい芸術運動があつた。ルドン、ルオー、マチス、ピカソらが、すでにサロン・ドートノンヌを中心に活躍していたのである。一年余りのパリ滞在后、生気に満ち溢れて帰国する。この時期の作品に、フランス後期印象派の強い影響を見ることが出来る。

故郷で仕事を再開したエミリーは、保守的な地元美術家たちの嘲笑の的となつていた。画塾の教師もやめさせられ、第

一次世界大戦が始まると、一層生活は苦しくなる。下宿屋をやったり、インディアン芸術を模した陶器を焼いて売るなどして口すぎとした。こうして芸術活動の休止状態が十五年も続く。長い不運の星霜であった。

転機は一九二七年、エミリー五十六歳にして訪れた。ハロルド・ラムという男が、インディアン芸術を東部に紹介するため現れ、彼女の作品に目をとめたのである。作品がトロントに送られ、東部画壇で活動していた七人グループとの交流が始まる。特に、キュービズムの傾向をもつローレン・ハリスからは、啓示的影響を受けることになった。

ハリスは、技法よりも芸術家の内面的態度を重視してエミリーを激励した。これを受けて彼女は「形、色、構成が優れていても、人の心を打たない作品は価値がない」と当時の日記に残している。

この時期の作品に、ハリスが絶賛し、



「ヘイナ」 The National Gallery of Canada, Ottawa



「クリアリング」 The National Gallery of Canada, Ottawa

これ以上の作品は描けまいと言ってエミリーを怒らせた「インディアン教会」がある。ピロードの幕を幾片も垂れたような森を背景にした白い教会堂は、見る人の心に迫るものを持っている。

やがて対象はインディアンから森そのものへと移る。インディアン主題は、人類学的関心から珍重されるため、芸術的良心にそぐわなくなっていた。一方、森は、永遠の神秘をたたえて彼女の身近にあった。彼女は愛犬を連れて森の中に入り、何日もかかって森を描きつづけた。

「グレー」は、若木を中心とした森のテーマを、光と暗のドラマチックな構成により歌い上げた傑作の一つである。森の上に空を見出した一九三〇年代の

作品では、広い空間が主役となり、その空間を僅かによぎる木々の梢は前景にすぎない。エミリーは、神を模索するかのよう空間に多くの円を描いている。シヤドポールトは語る。「エミリーは、林や野原や空や海岸から生命力を見出し、動きを表現する中に、新しい自由を求めたのだ」と。

一九世紀のケベックにおいて、つとにインディアンを描いたオランダ生れの画家クリークホッフの、あの冷めた写真の目と比べると、自らの国土の自然に魂を求めて描きつづけたエミリー・カーにおける、そのアイデンティティの確かさを思わずにはいられない。

最後に、評者としてこの書に望む余地は殆どないが、欲を言えば、修業時代のデッサン、とくに周囲の人物をシニカル



「森の風景II」 The National Gallery of Canada, Ottawa

な目で捕えた作品も（あるはずだが）加えてほしかった。

The Art of Emily Carr, by Doris Shadbolt (Clarke, Irwin / Douglas & McIntyre, 1979)

編集後記

〇久しぶりにカナダ文化特集をお送りします。多民族からなる若い国であり、しかもアメリカという大国が隣りに控えるカナダにとって、独自の文化を築くことは、「カナダ人とは何か」というアイデンティティの問題とも深くかかわる大きな国民的課題です。カナダを代表する文芸評論家ノースロップ・フライおよびジョージ・ウッドコックのカナダ文化論、ジャック・ホッジンスのカナダ文学論からそれを汲みとっていただきたいと思えます。

〇カナダ的アイデンティティを求める努力は、すでにある部分では大きな成果を上げています。ホッジンスらのコメントにもそれがよく現われていますし、ホッジンス自身の作品、グループ・オブ・イレブンの絵画、あるいはエミリー・カーの作品にも、カナダ的なるものが強く感じられます。

〇論文コンテストの作品は今号も掲載を見送らざるを得ませんでした。次号までお待ち下さい。

〇当広報部では、カナダの大学または研究機関で勉強・研究したことのある方々の名簿作りをしております。ご本人はもちろんのこと、心当りのある方は、ぜひ広報部の永野までご一報下さいませよう、ご協力をお願いします。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式分書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107東京都港区赤坂七丁目三三三八

カナダ大使館広報部